
one day.../**サスサク**

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

one day . . . /サスサク

【ZPDF】

Z6601A

【作者名】

深海

【あらすじ】

少女が少年に恋をした。でもそれは叶わない、ちょっと切ない恋。

(前書き)

少し前に書いたので時季はずれになってしましましたが、御容赦ください。

一人の少女がとある少年に恋をした。

理由は簡単。少年がとても優しく語りかけてくれたから。ただそれだけのこと。優しさを知らなかつた少女は、そのたつた一瞬で恋に落ちた。

だが少年は気付かない。

「可哀想に……せめて一日だけでも幸せになつておいで ただ、日付が変わる前に戻るんだよ」

報われない少女への天からの助けだろうか。少年に気付いてもらいたい少女は何度も頷いた。

「もう少しでお前の季節も終りだな」

木の幹に触れ、呴くように語りかけるサスケ。少女の想い人である。サスケは木の幹に背を預け、目を閉じ風の音を聞く。

「この風がなきや、もう少し綺麗なままでいられるのにな

そしてやつくりと田を開けると、先程まではいなかつた少女が立っていた。

木に語りかけるなど、里の誰にも知られたくないといふを見られてしまい動搖するサスケ。だが少女は意外にも、サスケを笑うことなどせずに微笑んだ。

「あなた、優しいのね」

「なに?……笑わないのか?」

サスケが問うと少女は不思議そつに首を傾げる。

「どうして笑うの？」

「どうして……木に話しかけるなんて変だ！」

「そんなことないわよ 私はとても素敵だと思ひます」

少女の言葉にこわいが照れ臭そうに後頭部を掻いたサスケは少女に歩み寄る。

「アンタ、名前は？」

「私？ 隅にはサクラって呼ばれてるわ」

サスケはサクラに恋をした。そして二人の距離は急速に縮まった。

「俺はサスケ なあ、少し話さないか」

「いいわ 日付が変わるまで……たっぷり時間はあるもの」

なぜ口付が変わるものまでと言ったのかサスケは首を捻つたが、すぐこそさくらと話すこと夢中になり深く考えることはなかつた。

あつと言ひ間に時間は過ぎていく。サスケは初めて、時間とこう単位を恨めしいと思つた。

「なあ、今日会つたばかりで変かもしけないけど……俺、さくらのこと好きになつたみたいだ」

サスケは焦つていた。今日初めて会つたさくらと、また会えるという保証はないのだ。今思つてることを全て伝えてしまわなければと思つた。

「会つたのは今田が初めてじゃないので……私はもうと前からさく君のことが好きだつたのよ」

記憶を出来る限り遡つたサスケだが、さくらと会つたといふ記憶はなかつた。でもそんなこと今はどうでもいい。さくらもサスケのことを好きだと言つてくれたのだ。

「本当か」

「……ええ」

笑顔のサスケとは対象的に、サクラは寂しげに微笑んだ。
辺りはもうすでに暗くなつていて、戻らなければならぬ時間が近付いてきていた。

「私それも帰らないと……」

名残惜しげに背を向けるサクラ。サスケはその腕を取り、そのまま後ろから話しかける。

「また会えるよな?」

背後にはいるサスケには見えなかつたが、サクラは静かに涙を流していた。

「なんで黙ってるんだよ　会えるよな？」

「……やあひなうつー！」

サスケの言葉に答えず、手を振り払い走っていくサクラ。答えを聞けず納得のいかないサスケはもちろんサクラを追い掛けた。男と女。すぐに追い付けると、サスケの思いとは裏腹に、どれだけ走ってもサクラの姿は見えなかつた。

「どこへ行つたんだ……」

気付けば辺りをぐるりと回り、元いた場所に戻つてきていた。サスケは木の幹にもたれかかり、乱れる息を整えながら夜の黒に映える桜の木を見上げた。

「なあ、サクラがどこに行つたか知らないか？……知つてゐるわけないよな」

ふつと笑みを溢すサスケの頬に一滴、雫が落ちた。サスケはその雫

を手で拭い、空を見上げる。

「雨……？」

だが雨など降つておらず、落ちてきたのはその一滴のみだった。

その雫は少女の涙。自ら望んでサスケに会いに行つたが、こんなにも苦しいのなら止めておけばよかつた。

それでも少女は懸命に微笑む。例え一日でもサスケと話すことができた。気付いてもらえたのだ。

少女は哀しみと喜びを胸に抱き、サスケを見下ろしながら散つていった。

桜が一瞬、一際華やかに見えたのは氣のせいだろうか。いや、確かに風に乗つてたくさんの花びらが舞う直前、最後の力を振り絞るよう限界まで花開いた。

サスケはその美しさに、全てが散り行くのを立ちつくしてただ見ていた。

だが少年は少女に気付かない。

f
i
n
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6601a/>

one day.../サスサク

2010年10月13日22時43分発行